



(NO FENCE IN NORTH KOREA)

NO FENCE

E-mail: nf-staff@netlive.ne.jp

北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」
会報 かいはろノーフェンス

NO FENCE

誇りある人間として、
歴史に禍根を残さない
ために、囲いの中に
閉じ込められ、いのち
を冒瀆されている人た
ちを放置しない。

vol. **10**

2010年11月

〒102-0093 千代田区平河町 1-5-7-203 TEL&FAX 03-3262-7473 <http://nofence.netlive.ne.jp> 【郵便振替口座】 NO FENCE / 00180-1-707147



▶ INDEX ◀

●NO FENCE 最近の活動	2
●後継者正恩と正男／黄長燁(ファン・ジャンヨブ)氏死去	3
●証言「私は28年間収監されていた」	4
●収容所の自作イラスト	8
●講演会「天国と地獄」を聞いて	10
●[基礎知識]〈9〉恐怖の根源	12
●UNCol要請とCII訴追相談会報告	13
●トロント国際会議報告	14
●トロント国際会議報告	15
●オタワ国際議員連盟総会報告	16
●黄長燁氏亡命時に遺書	16

特集

民主化を訴えたら、犯罪に!?

11年の刑が課せられた中国の劉曉波氏に
正反対の評価ノーベル平和賞。
国家権力の万能妄想は必ず瓦解する。

藤本健二さん
金正日の料理人の世界と
強制収容所の世界
収容所体験者

北朝鮮の内実をさらに深く知る

天国と地獄そしてその先をどうする?

黄長燁氏逝く





「ボク目を見て!」「ボクを愛して!」



この子は野良ちゃんです

8月～10月
2010年
最近の活動
NO FENCE

■ 8月6日

『開かれた北韓放送』* 代表のハ・テギョンさんを招き記者懇談 (報告 /13 頁)

■ 8月21・22日 カナダトロント「北朝鮮人権・難民国際会議」ロビー活動 (報告 /14・15 頁)

■ 8月23～25日 カナダ オタワ「北朝鮮難民と人権のための国際議員連盟」総会 (報告 /16 頁)

■ 9月8日 民主党国際局担当者へ、「要望書」共同提出。

(日本政府は、北朝鮮の人権状況に関する国連における「事実調査委員会」の設立を公けに支持することと共に、決議提案や同決議採択に向けたリーダーシップをとることを求める内容の要望書)

共同提出団体
ヒューマン・ライツ・ウォッチ
北朝鮮難民救援基金
北朝鮮による拉致・人権問題に取り組む法律家の会
特定失踪者問題調査会
北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会
NO FENCE

■ 9月9日 国連北朝鮮 事実委員会 (NK UN Col) と ICC (国際刑事裁判所) 訴追の勉強 & 戦略会議 (報告 /13 頁)

■ 10月10日

講演会 →
(4～11 頁)

北朝鮮の内実を知るための講演会

北朝鮮の王国と地獄 金正日の料理人 VS 政治犯

後継者金正恩の登場に関心が注がれています。この権力世襲は今後何をもたらすでしょうか。我々はこれをいかに見、対処すべきなのでしょう。これを考えるのが本題です。

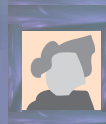
金正日の宮内に入り、外国人でありながら13年にわたってファミリーと身近に過ごすという稀有な経験をした『金正日の元料理人』藤本健二さんをお招きし、その経験と実証に基づいた展望を伺います。

合わせて、2009年上期から後継者は金正恩に決定しているとして詳細な内部情報を伝えた『開かれた北朝鮮通信』発行人の河泰慶 (ハ・テギョン) さんに、金正日死去に備え始めた北朝鮮権力中枢の最新情報を披露していただきます。(金正恩に関する中央党教育資料全文も世界初公開の予定) ここに、北朝鮮体制を根拠で支えている「政治犯収容所」経験者の体験を照らし合わせることで私たちに何が見えてくるのか、北朝鮮権力世襲の内在的理解を試みます



◆ 藤本健二さん (金正日の元料理人)

1982年8月 月給50万円を提示されず職人として訪朝
1987年 再訪朝。金正日の専属料理人に。
2001年4月 北朝鮮を脱出
北朝鮮滞在13年の間、7歳から18歳までの金正恩とも身近に過ごす
「金正日の専属の後継者は金正恩」と一貫して伝える
北朝鮮に妻と一男一女
著書に『金正日の料理人』ほか
最新刊『北の後継者 キム・ジョンウン』(中央公論新社ラクレ)



◆ キム・ヘスウさん (13歳から28年間収容されていた)

1962年 平壤市生まれ
1975年 連座制により平安南道北倉郡の18号管理所移住
家庭労働に従事
2001年2月16日 解放(出所)
2008年1月25日 18号管理所に再移送
2008年3月 18号管理所から脱出
2008年6月5日 渡山から中国に
2009年3月 韓国入国

◆ 河泰慶 (ハ・テギョン) さん (中核内部情報をいち早く発信)

社団法人『開かれた北韓』代表
ソウル大学助産学科学士
高麗大学大学院にて国際関係学修士
中国吉林大學にて国際経済学博士
SK Telecom 経営経済研究所主席研究員
2005年 北朝鮮向けラジオ局『開かれた北韓放送』開設
2009年2月 ニュースレター『開かれた北韓通信』発刊。
同通信にて、複数の北朝鮮内部情報筋からいち早く金正恩後継決定をキャッチ、その動向を報じ続ける。

2010年 **10月10日** (日) **開演** 開場: 午後1時
午後1:30～5:30

会場/ 明治大学 駿河台キャンパス
リバティータワー 1031 大教室

参加/ 無料

◎本研究会・講演は、学術振興会科学研究費助成の研究成果によるものです。

共催/ アジア人権人道学会・NO FENCE・開かれた北韓放送
問合せ/ NO FENCE (北朝鮮強制収容所をなくすアクションの会) 担当 070-5459-9817
E-mail: nfstaff@netlive.ne.jp http://nofence.netlive.ne.jp

★ネットライブによる同時中継があります。
<http://www.netlive.ne.jp>

*『開かれた北韓放送』(英称: Open Radio for North Korea, 略称: ORNK) は対北放送の一つ。「開かれた北朝鮮放送」とも呼ばれている。

2005年12月、開局。韓国初の民間による対北放送である。放送言語は朝鮮語のみである。現在の代表は河泰慶 (ハ・テギョン)。

2010年

10月

長男

金正男氏の発言と中国の後ろ盾

●「天安艦は金正恩の仕業」と父に抗議

8月末、金正男は中国を訪問した父の宿舎を訪ね、『金正恩(キム・ジョンウン)が無理に貨幣改革(デノミ)を推進して失敗し、これを挽回するために天安艦事件を起こした。金正恩の顔が知られる前に起きたことなのに、天安艦事件を起こすのをなぜ黙認したのか』と抗議した。さらに『金正恩が自分の過ちを認めず、ずっとこういうことを続け、これを父が黙認するのなら、私も自分の道を進む』と話したという。(KBS (韓国放送公社) 2010.10.14)

●3代世襲に反対

ここに来て、金正日(キム・ジョンイル)総書記の長男・金正男(キム・ジョンナム)の発言が注目を集めている。10月11日、北京でのテレビ朝日とのインタビューで「3代続いて権力を世襲することに、個人的には反対する」としつつ、「決定には従うべき」「弟が必要とする際には海外から助ける用意がある」と発言。(中央日報10.10.12)

●金正男氏を暗殺計画→「平壤版王子の乱」(「ウアム閣襲撃事件」)

昨年の09年4月、金正恩は、潜在的脅威である金正男の権力基盤を崩そうと自身が掌握している情報機関の国家安全保衛部要員を動員して金正男の平壤滞在時の隠れ家を襲撃したことがわかっていて、中央日報イ・ヨンジョン記者の新刊「後継者 金正恩」(ヌルプムプラス刊)のイ記者は「ウアム閣事件は後継者の金正恩氏に平壤の絶対権力が傾く時点に出た兄弟間の権力争い」とし、これを「平壤版兄弟の乱」と名付けた。(中央日報10.10.13)

●中国が金正恩に、「金正男に手を出すな」と警告

10月12日の韓国メディアの関連報道によると、「金正恩氏の側近たちが海外であれこれ話す金正男氏をただではおかぬという動き(金正男氏に近づく計画)を見せたが、中国側が『正男氏に手を出すな』『中国の領内では絶対に接触するな』と警告メッセージを送った」と報道した。金正男氏は中国高位層の子弟の集団である「太子党」と親交が深い。北朝鮮崩壊時、中国が金正男氏を指導者に据え、北朝鮮を吸収しようとしているといううわさも、こうした状況と無関係ではない。(中央日報10.10.13)



八日、金正恩氏が後継者と認定
三男

呻吟の民の上に君臨する者・大地に還る者

九月、黄長ヨブ氏死去
(ファン・ジョンヨブ)

民主化に捧げた余生

1997年2月に亡命してから13余年、黄長ヨブ(ファン・ジョンヨブ)元北朝鮮労働党秘書が9日亡くなった。発見されたのはその翌日。高齢だったとは言え13年はあっという間に過ぎて終わった。

黄氏については、これまでの言動に不足を感じたり、もっと黄氏から得たい情報があったのに残念という声も聞かれる。それまで北朝鮮でやってきた責任(主体思想の創始者)の重さを考えても、決して英雄視されるべき人ではないにせよ、黄氏の亡命の動機やその後の態度を価値がないと見ることはできない。逆に、最高峰の身分で恵まれた立場にあったという大きな違いはあるが、ひとりの人間として祖国の同胞を想う気持ち、人間の良心を持って決断し行動を起こしていったことの意義は大きい。そして、貧困と飢えに喘いだ他の民と同様、一番大事な家族をも捨てるという大きな犠牲を払ってなお、個人の幸福を超えた使命を抱いて行動した点は、当然の務めでもあろうが、素直に認めたいと思う。黄氏の想い、私たちの想い、共に繋げていくことしかない。

2010.10.18 中央日報の記事では、以下(抜粋)のように記されている。『(前半略)

黄長ヨブはどの亡命者にも劣らず凄絶に共産独裁の反文明を告発した。黄長ヨブは告発のために家族を捨てた。夫人は自殺し、息子は政治犯収容所に入ったと伝えられている。人間は大義のためにどれほど過激になれるか。黄長ヨブは平壤(ピョンヤン)を離れる前日、妻に書き残したという。「私を許すな。私とあなたがいつか一緒に会えるあの世があることを望む」。(中略)

告発者の黄長ヨブは不幸にも金大中・盧武鉉政権の10年間は報われなかった。黄長ヨブはあらゆるものを捨てて駆け込んできたが、両政権はむしろ黄長ヨブを鳥かごの中に閉じ込めようとした。黄長ヨブが鳥かごの外にいれば、「北朝鮮民主化運動」は韓半島の歴史の重要な動力になっていただろう。今ごろ北朝鮮体制の運命も変わっていたかもしれない。』



「私を許すな。私とあなたがいつか一緒に会えるあの世があることを望む」

黄長ヨブ氏が平壤(ピョンヤン)を離れる前日、妻にこのように書き残した。

強制収容所に 13歳から

私は28年間収監されていた

連座制という罪状(理由)で



2010年10月10日 『北朝鮮の天国と地獄』の講演会より

キム・ヘスクさんの証言

(通訳: 宋(NO FENCE事務局長))

宋(通訳兼進行): 私のほうからあらかじめご説明いたしますと、この間私どもも北朝鮮の強制収容所出身者の方を複数名日本に招きお話いただく機会を作りました。ただその方々の出身の収容所というのはもっぱらヨドク収容所、15号のヨドク収容所の革命化区域と呼ばれる基本的には生きて出られる可能性の残された所の出身者が多く、それ以外は、完全統制区域、若干1名、シン・ドンヒョクという方、収容所で囚人の両親の元に生まれながら、政治犯といえますか奴隷といえますか、20数年育った方のいた収容所ですね。それ以外に20号の会寧という中朝国境に近い所ですが、そこで警備隊員をなさったという方々の話等たくさん聞きましたが、今回呼び出したこのキム・ヘスクさんご出身の18号の北倉(プッチャン)の収容所というのは非常に特徴があります。特徴は何かといいますと、様々な階層の人達が入れられている所であるということ、その中には1年くらい再教育といえますか、革命化というかたちで送り込まれてくる幹部クラスの方々もいれば、下層民として単純労働に従事し続けるという方々もいる、そうした方々の階層があるのですが、その階層の移動ということもあるんですね。大同江というピョンヤンをも流れている川沿いの広大な区域、川の流域おおよそ40キロほどにわたる区域に最盛期では5万から6万程の人がいて、80年代後半から、90年代初頭にかけて、あまりにも人数が膨れ上がったものですから、ある区画から分けて一般社会の扱いをして出す所と引き続き収容所として閉鎖的に運営するところという区域を分けて、その閉鎖されている所の人口が2万数千という人口なのですけれども、いずれにしても、ある意味で、歴史の生き証人ですね。北朝鮮の強制収容所の非常に特徴的なところの歴史の生き証人となった方であります。

キム・ヘスクさんどうぞご登壇お願いします。

(宋氏の解説付き通訳)は、**キム・ヘスク**と表示しています。また、文中の「この方は」は、**キム・ヘスクさん**を指します。)
(**キム・ヘスクさん**)は、以後“**キム**”と表示。)

「こんにちは、キム・ヘスクです。」

宋: すみません、前置きが長くなって恐縮なのですが、この方の経歴が非常に入り組んでいてわかりにくくてですね、皆さんに事前にお配りしたチラシでは、非常に簡略化した形でしか伝えていないのですが、折々私のほうで、ちょっとわかりやすくした方がいいかなということ、合いの手を入れますので、ご容赦いただきたいと思います。本来この地図ですね、略図、この方がお描きになったものですが、お描きになった後、Google Earthで対照しましたらその通りだということ、ヒューマンライツウオッチという人権団体のリサーチの結果信用もつきまして、本当でしたら今月の16日、数日後に、チューリッヒのオークションで実は出品予定だったのです。ヒューマンライツウオッチのバックアップで。ところが、日本でこのイベントをやりたいと私が要請しましたら、そのオークションを蹴ってこちらに来ていただいたんですね。本当だったらこれが、多分、何百万円か千万相当で売れたと思うのですが、それをけてこちらに来ていただいたわけですね。その意味でも非常に我々の集いというものを評価してお越しいただいたので、皆様ご清聴宜しくお願いいたします。

連座制

キム(**宋**): 「この方は1975年の13歳の年に連座制でこの収容所に送り込まれたのですが、連座制というのは何かといいますと、朝鮮戦争のときにおじいさん、父方の祖父が南に逃げたということで、おばあさん、父方の祖母と一緒に暮らしていたのですが、一家、この方のお母さん、お父さん、その他の家族は1970年に先にこの収容所に送られて、この方は実は母方のおばあさんの家に預けられていたものですから、その当時は収容所送りにされず、5年後に地域の保衛部の人物が盛んに来て、『こいつを収容所に送れ』とおばあさんにせった結果、75年にこの18号、北倉の収容所に送り込まれました。」「この収容所はですね、高さ4メートルの鉄条網で、その鉄条網を境に3メートルの幅で逃げたらすぐ足跡がわかるように木とか草は刈ってあるのです。これは衛星写真で確認できますけれども。その中に入

れられてこの収容所ではもっぱら、炭鉱労働が多かったです。」

「この収容所では彼女がいた当時は、まだ配給というのがありました。収容所で、6人家族で暮らしていましたが、その一月に与えられるとうもろこしの量はおよそ7キロから10キロ。それをもらって、ずっと家に置いておきますと乾いてきて量が減ってしまうのですが、それだけでは命をつなげられないので、炭鉱労働に行き通う途中で道端に落ちている、例えばどんぐりですとか、あるいは生えている草、雑草、こういったものを手当たり次第、摘めるだけ摘んで袋に入れて持ち帰り、それをかゆにしたり煮ておひたしにしたりして食べて命を永らえていました。」

「この方のお父さんという方はですね、キムヘスクさんが収容所に入る前の74年に保衛部に連れて行かれて行方知れずです。その後の消息はわかりません。この方のお母さんは、79年に山で山菜を摘んでいた時に崖から落ちて死んでしまいました。その結果、18,19歳でこの方が世帯主となりまして、自分の父方の年老いた祖母と自分の弟、自分が両親と離れている間に新しく生まれた弟、妹達、6人家族ですね、彼らをこの方が命を永らえさせねばならないという責任を負わされることになったのです。」

収容所での日常

「収容所内でも学校というのがありました、小学校、中学校というのがあるのですね。何を教えるかということ、最低限の国語で、そこで教える人というのも教員免許があるわけではありません。簡単な算数と仕事の指示が理解できるように国語力つけるためです。午前は小学生が通って、午後は労働に出る、それと入れ替わりに午前は中学生が労働して、午後から来ると、そのような入れ替えです。この方が収容所にいた時、キム・ジョンイルの指示が下ったと。指示は何かということ、この中に入れられた人間1人と石炭1トンを引き換えにしても惜しくない、その位、しっかり石炭採掘させろという指示で、この方は、学校を出たらすぐに、石炭の採掘工という形で送り込まれました。石炭を採掘する上で、仕事はそれぞれ別に機能別にありまして、採掘するための坑道を作るための掘進工というのですね。石とかよけて、石炭を採掘できるように下ごしらえする掘進工があり、この方は石炭そのものを採る人として労働に従事していたそうです。」

「そこでは、もちろんマスクも何もつけないで石炭採掘するので、この方も30過ぎまで、13年間程、石炭採掘しましたが、韓国でレントゲンを撮ると肺が粉塵で一杯なのだそうです。ちょっと動いても息が上がる位なのですが、その収容所の中では40になる前に男女を問わず死ぬ人が多いと。石炭採掘にまわされますと、40になる前に多くの人が死んでいくということです。」

「親族が死んだ人を山に埋めに行くのですが、埋めたら何日かは守っていなければいけないのですね。そうしないと他の囚人達が掘り起こして食べてしまうものですから、他の囚人に食べられないように親族の遺体も守らなければならない。そういった所に自分が何で放り込まれたのか、この方自身は2002年、2005年に出るまで知らなかったのです。出た後に聞かされた話は、この方の父方の祖父が朝鮮戦争のときに朝いなくなりました。それ以降見当たらないので、おそらく南に逃げたのであるという推測のもとに一家が連座制で70年代以降収容所に送り込まれたということです。」

餓死するまで働かす

「この収容所の中にいまして、それでも金日成が政治をやっている時代は配給はちゃんと出た、少ないものであっても、とうもろこしと塩の配給は、ちゃんと行われていたの、栄養失調で浮腫が出て、餓死するという人はそれ程出なかったのです。ところが、金正日が政治をやるようになってから、特に1996年以降からは餓死する人が道端でそのまま倒れている。なぜ倒れているかという、食糧もないのに労働に出ないと処罰を受けるものですから、食べられないまま労働の現場に向かって、そのまま行き倒れになってしまうという人がかなりの数出ました。その様子を描いた絵がこれ(会場に貼られた一枚の絵を指しながら)なんですね。“道端で死んだ人達”と書いてありますが、食べ物もないまま労働の現場に向かって、そのまま行き倒れになった人達です。」

「常に過酷な労働にさらされているものですから、この方々は常に塩分が足りないというのですね。収容所では一月に一人当たり600グラム、キムチを漬けるような10月になりますと、1キロとか、1,5キロとかの塩を配給されるのですが、それでも塩分が足りなくてですね、何しろこの方々が食べる物といえば、道や山に生えている草をむしって、それを食べるわけで、当然えぐみとか、渋みとかあるわけですから。それを落とすためにも塩を使う。」

味噌の配給もあるのだそうです。3ヶ月ないし4ヶ月に1回、味噌の配給もあるのだそうですが、スープにして食べる余裕はなく、配給されたらすぐその場で口に入れます。それでも、しょっぱさは感じなくもっと欲しいと、常に塩気に飢えていたということです。」

「この方が、本当に金正日が悪い人間だと思うのはですね、子供達が3,4歳になり、言葉を覚えるようになると、何かあるごとに、『將軍様有難うございます』と言わせお辞儀をさせるのです。条件反射で刷り込むようにですね。ところが子供達はこの収容所で暮らしている間に、ただの一度も米の飯を食べたことがない、せめてとうもろこしの飯でさえ腹一杯食べられればというのが願いでありました。」

空腹のままの娘・息子を洪水で失う

「この方は、収容所内、18号ではですね、階層によって結婚ということも認めているのですね。収容所内で結婚し、子供が2人できました。その後、解除というのですが、この収容所に拘束し続ける当初の理由が消滅したということが認定されて、それは、すなわち、この方のおばあさん、お父さん、お母さんすべて亡くなった為、本当だったら、おばあさんが亡くなった時点で出されてもよいはずなのですが、この方、賄賂を渡すということに頭が回らなかったものですから、そのまま、ずっと居続けて、そういうことをしなければ出られないのだということを知ってから賄賂を渡して、ようやく2002年にひとまず出るので。収容所内で生まれた娘さんが13歳、息子さんが9歳の時に、2003年ですが、この方が世帯主で働いて食わせなければならないものですから、おばの家に預けていたのですが、おばの家が大洪水で流されてしまいました。娘さん、息子さんもそれ以降行方が知れず、おそらく死んでいるだろうと。この方は、ただの一度も満足にご飯を食べさせられなかった娘、息子のことを思うと夜も眠れないです、という話をしておられます。」

「今、この方は略図をもとに収容所の構造がどうなっているかということなのですが、この方が収容所に連れて行かれたのは1975年です。その時に、母方の祖母に預

かってもらっていた、その祖母は年が多いため連れて行けないので、この方のおばが当局から呼ばれてこの方を連れて、収容所まで引継ぎに行ったのです。この収容所の入り口が、今、この方が示された入り口から山道を延々と十数キロの道をここまで引き継ぎでおばが連れてきたということです。」

「連れて行かれた住居というのがですね、もともと、牛小屋だったものなのだそうです。牛小屋だったものの中に仕切りを作りまして屋根をわらでふいたもので、家に入ったら天井もないのですね、そのまま藁葺きが見えます。雨が降った時は水が中に入る、雨漏りしていたということです。」

「とにかく管理する人達、他の収容所は保衛部管轄、ここは安全省管轄なのです、いわゆる警察です。その管理する人達はとにかく石炭、石炭ということで、石炭の生産のノルマ達成に血眼でありまして、建前上、規則では、一日8時間労働にはなっているのですが、実際は16時間、18時間という労働時間、毎日、その労働時間でした。」

「この収容所内でも公開処刑というのがさかに行われまして、基本的には銃殺が多いのですが、絞首刑でもやります。平均しますと、月に2回か、3回、多い時はですね、7回か、8回でこの7回、8回というのは先程、ハ・テギョンさんが言及された、深化組事件の時、要するに幹部で連累になった人が送り込まれて公開処刑されたのですけれども、その話も、のちほどしていただきます。」

公開処刑



「この方が居た当時ですね、盛んに公開処刑やったのは、ここだったのですね。大同江なのですけど、この川辺で盛んに公開処刑をやりました。89年からはこの今居る、東側の区域が一般社会のほうに開放されて、どうなったかというと、新たに、鉄条網をこの山を境にして設え、こちら側(西側)に収容所を集約したのです。89年以降はこの方もこちらに暮らしていたそうです。」

「この方はここに都合12年いて、その後も結局、ここから解除というかたちで、ひとまず、革命化が終わったという扱いになったのが、2001年だそうです。どういうことをしたかといいますと、一生懸命、ここでウサギとか豚を飼ってそれを、党の人間に捧げるということを盛んにやったのですね。ここで、革命化が終わり解除というのが、金正日の誕生日2月16日、金日成誕生日の4月15日、あと党の創建記念日の10月10日、こういう日に解除ということを発表するのですが、この方は2001年の2月16日に賄賂を地道に贈り続けたのが功を奏しまして、ひとまずここから解除と、ある程度の自由が得られる身分となりました。その時にこの方のご兄弟も、一緒に出たのですが、都合、7世帯出たのですが、実はまだ、この方の家族で、収容所内にまだ残っていらっしゃる方がいるのです。」

「一番、公開処刑を盛んにやったのは、1997年から2000年にかけてだそうです。多い時は一日に6人も8人も公開処刑やりました。やる時には、前日に布告文が貼りだされます。公判をやるので集まれと。これは逃れることはできないのです。1人残らず集まらなければなりません。」

「この方がその間に見た北朝鮮の幹部達ですね、送り込まれた人々の名前を今おっしゃったのですが、1人は文先述(ムン・ソンスル)、実は先程藤本さんが集合



写真を大きく出していただきましたが、その中に写っている右端の人です、藤本さんまだいらっしゃいますね、後程ご一緒させていただきますけど。この人はこの方の住んでいた家の300メートル後ろの家に住んでいて、炭鉱労働させられていたそうなのですが、炭鉱で事故にあって、倒れていたというのですね。この絵に描かれている、倒れて抱えられている人が実はムン・ソンスルさんなのです。要するに藤本さんともお知り合いというか、お付き合いがあったといいますか、そういう方々が実際、その時期に送られていたということです。あとは、北朝鮮では、隠れた英雄という評価が高い、ペク・ソルビという科学者で女性の方なのですが、その方もここに送り込まれていました。」

「そのように北朝鮮の幹部達も盛んに送り込まれたのですけれども、先程御紹介いたしましたように、1997年にこの方が聞かされたこと、キム・ジョンイルがそういうところに送り込む人間達は要するに全然惜しくないと、石炭1トンと引き換えにすれば十分であると、従って、牛馬のごときに酷使せよと、そういう金正日のお言葉があってそういうところに送り込まれたものですから、江原道の党責任秘書ですとか、平安南道の道党責任秘書、開城市党の第一秘書、こうした人達本人だけでなく家族も一緒に送り込まれて、炭鉱労働に酷使されていました。」

奇跡的脱出の背景に地獄の極地

「ただ、この方も20数年いて、生きて出たというのも、この人にとって奇跡でした。ただこれは、後に知った所では、まだ、彼女がいた当時の状況はましであった。ましであったのはなにかといいますと、一旦この方は解除という扱いになりました。で、一般社会に出たのです。出た後に、このままでは子供達を養えないということで、2005年に脱北しまして、中国で食堂の賄いの手伝いをしてひそかに暮らしていたのですが、その食堂の主人から北朝鮮で豚を仕入れて欲しいという注文を受けて、ひそかに2007年に北朝鮮に戻ったのですね。茂山郡に。そしたら、又ここで捕まってしまって、又この収容所に2007年の暮れから2008年の頭にかけて送り返されてしまったのです。で、その当時の状況が、この方がいた頃より格段とひどい状況になっていました。」

「この方が又この収容所に送り込まれたのが2005年の1月25日だったのですが、その時にはこの収容所で餓死する人が大量に出ました。また、人間を食うという事件が多発していたものですから、取り締まる側の安全部の人間も、この人にかまっていられなかったのです。かまっていられずに男の囚人達は房に入れられていますが、女性用の房がないので、洗面所みたいなところに、この人は繋がれていたのです。」

「これはですね、彼女がそこにとらわれている際に送り込まれた殺人犯の女性の絵なのです。38歳の女性だったそうです。それが9歳の娘を鍋で煮て、釜で煮て食べてしまったと。で、『何でそんなことをしたのですか?』とこの人が聞きましたら、もう食べるものが何もないと。『私が死んだら、この娘も死ぬばかりである。それだったら、せめて死ぬ前におなか一杯に満たしてから死にたいと思った。それで今手元にあるのは塩しかないで、塩で娘を煮てその肉を腹一杯食べてそれから自分は自殺するつもりだったのだけど自殺する前に見つかり捕まってここに送られてしまった』と。そういう話でした。」



「これ、もう一件ですね、自分の子供を直接食べたという人の事例です。この人が直接死体を目撃したのです。この女性は43歳になる方です。この方は夫も死んでしまいました。食べる物がなくて、16歳の息子の頭を斧で割って殺してその肉を全部削いで、豚肉と称し、売ってその引き換えにとうもろこしを十数キロ仕入れて、それを食べたという人なのですね。安全員がこの方（キム・ヘスクさん）に指示してビニールの包みを持って来い、そしてその場で開けるといので開けましたら、斧で割られた16歳の息子の頭と手首から先、足首から先が入っていたのだそうです。頭を見ますと、頬の肉まで全部削いであって、肉が無かったと。で、斧で割ったせいか、目玉が両方とも飛び出て、垂れていたそうです。それを直接この方は目撃したそうです。」



「安全部のほうでもそういう事件が頻発していますね、この人の取り調べにかまっている暇がないわけですね。で、金正日の誕生日の2月16日が近づいていて、俺達も休息とらないといかんと、お前をかかえているわけにいかん、と、この人を連れて行ったのが、十数キロの道のりらしいのですが、労働教養所というものが収容所の中にもあるのだそうです。労働を怠けたとか、そういう人達を懲

らしめるための施設が別途あって、そこの中にこの人を送り出したのですが、そこには男性ばかり40人収容されていて、女性の房は無いものですから、しかも身体もガタガタで虚弱になっているものですから、食堂の仕事を手伝えということになって、食堂の仕事をし、しばらく様子を伺っていたのですが、このままここにいたのでは、当初この方がいた当時よりも、はるかに劣悪な状況になっているので、自分は飢え死に、死ぬことになるのは間違いないということで、隙を見つけて3月2日の夜中の9時に逃げて、また中国に入ったのです。この方、こうやって地図が書ける位詳しいですから、又、逃げ出して中国の方に逃れて行ったとのこと。」

人民を苦しめる政権は早く減って、 苦しみは終わりに

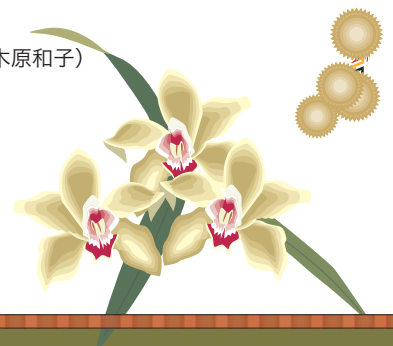
「茂山のほうに行きました。そしたら、茂山の国境警備隊の中で中国の朝鮮族の人身売買やっている人間達とつながっている人達がいまして、その軍人をお願いしたら、自分をブローカーに引き継いで渡してくれたというのです。川と一緒に渡ってですね。それで、いくらで自分は売られたのか定かには知らないのですが、一旦そういう形で中国に入り、それから東南アジアルート、ラオス、タイのルートを経由して逃れてきたとのこと。」

「この方が東南アジアに逃れるときのチームが16人だったのですが、メコン川を高速のボートに乗って逃げ続けたのですが、その過程で43歳の女性一人はですね、川に落ちてワニの餌食になってしまいました。」

「この方からするとこのようなひどい所で人民に苦しみを与えている政権がまた子供に引き継がれると、こうしたものは早く減んで欲しいと心から願っておりますし、人生の半分近くをこうした環境で過ごしたのは思い起こしたくも無いのですが、韓国に行きまして、韓国の取調べを受ける中で、書けるだけ書いて思い出していくなかで、こういう実態を告発するといったことも大事なことだと思い立ってですね、今年になってからこういう証言も始めたのですけれども、なかなか信じてもらえない、理解していただけないという思いがありまして、少しでも理解の助けになれば、と、こうやって場面を絵に描いて見せるようになったわけです。」

「北朝鮮の一般の人でもここにこういう収容所があるとは知らない人が多いのです。ただ、北倉郡鳳倉里、そこは炭鉱だっただけ知っている人が多くて、ここまで囲いこまれて人がバタバタと死んでいるような状況となっていることを、北朝鮮の一般の人でも知らない人が多いですね。これ大同江がありますけれども、隔てて向こうは14号の強制収容所です。价川(ケチョン)の14号管理所です。こういうところで囚われている人達の苦しみは早く終わりますように、人間らしい生活ができますように皆様の御関心と、お力添えをお願いして私の話をひとまず終わりにしたいと思います。」

(テープ起こし・写真撮影：木原和子)



体験を元に 金ヘスクさんが描いた絵

나무 껍질로 살아야만 하는 세상



木の皮を剥いて食べて生きるしかない

발벗은 아이들.



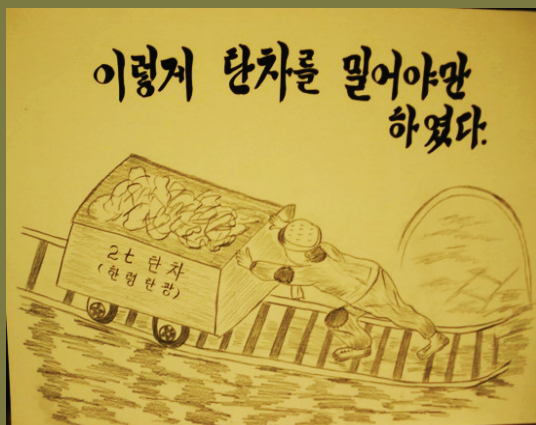
はだしのこどもたち

교수형



公開絞首刑

이렇게 탄차를 밀어야만 하였다.



炭坑でトロッコを押す女性

쌀밥! 한사발 먹어봤으면...



まともな食べ物がない職食卓

이것이 바로 이복의 혈설이다.



娘を鍋で煮て食べた母親

자식도 서슴없이 잘아야 하는 어머니...



息子を食べるしかない母親

※金ヘスクさん自身が収容所の全体を描いた大きな地図と、収容所で実際に会った体験などを描いた絵を今回は二十枚近く持参された。
いづにあるのは、その中の一部。

2010年10月10日(日)

北朝鮮の内実を知るための講演会

北朝鮮の天国と地獄

強制収容所

金正日の料理人 VS 政治犯

対論

共催／アジア人権人道学会・NO FENCE・開かれた北韓放送



おはなし◆ 藤本健二さん

元金正日の料理人

◆ キム・ヘスクさん

28年間収監されていた

◆ 河泰慶 (ハ・テギョン) さん

『開かれた北韓』代表

この集会は、北朝鮮の階層の、例えて言うならば、鍋のフタ部分と穴の空いた底にあたる部分での生活を、対局するおふたりの立場から、その体験を語って頂くという試みです。

さらに、そこに第三者の視点、客観的メディアの立場から、情報の精度に基づき北朝鮮情勢を深く読み取り分析や展望を語って頂くことが加わりました。

企画から当日まで殆ど準備や広報時間がない中で、大変貴重なゲストを迎えることになりました。にも関わらず一般の方やマスコミの方が多く参加してくださいました。

しかし、残念に思ったことは、この集会後に報告されたメディアの記事には、見た限り強制収容所に28年間も収監されていたキム・ヘスクさんのことには、一行も触れていなかったことです。その理由は分かりませんが、明らかに意図的な配慮と思えます。少々悲しい気持ちになりました。世間の関心は、これらメディアの報道のいかに左右されます。北朝鮮問題を考える時に、それこそ鍋の底や穴の空いた底の問題に目を向けずにいては、ただのゴシップ記事に終始してしまう恐れさえあります。

藤本さんのお話は、別な視点から興味深いものがありました。金正日氏の傍で優遇されていた人には、金書記は”好感度の高い人”に映っていて、金書記の私生活以外の側面を知る機会がなく、「金書記は収容所の実態を知らないのではないか?」「どんなことが行われているのか把握してないと思う」と語り、後継者の三男正恩氏のこと、共に過ごした感覚から親近感を持って評されている。兄気心か親心といったものを感じました。

しかし、人間はいかようにも育成されます。幼き頃の天真爛漫さも、いかようにも変容されます。

北朝鮮での天国のような甘美な体験の記憶から中々抜けきれないように見受けられた藤本さんも、このような『地獄(強制収容所の実態)』を知り、そのギャップに衝撃を受けて頂けたとしたら、今後の講演など活躍の場でさらなる深いお話が聞けるのではないかと期待したい思いがしました。

三人のゲストの方に、感謝します。とりわけ28年間も筆舌し得ない収容所での体験を強いられたキムさんのお話を、短時間のうちに、「分かった。聞いた。」という気になってしまいがちな軽さを恥じなければという思いを、改めて心に留めました。(M.O)

<三人の講演者への質疑など次号で引き続き掲載予定しています。>

＜北朝鮮の内実を知る講演会＞ —北朝鮮の天国と地獄— 『金日正の料理人 vs 政治犯』

三浦小太郎

北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会代表
<http://hrnk.trycomp.net/index.php>

10月10日午後1時半より、ノーフェンスならびにアジア人権人道学会主催の講演会が開催されました。宋ノーフェンス事務局長の挨拶で講演会は始まり、まず、アジア人権人道学会代表の川島准教授が、今日の講演会の重要な意義として、まず、北朝鮮で今起きている事実、現実を知ることから始めよう、そのために、本日の3人の講演者のお話を参考にしてほしいと述べました。



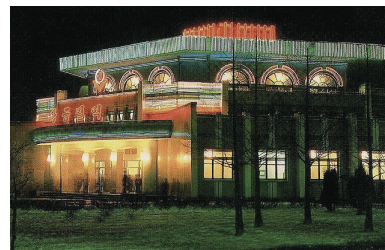
最初に藤本健二氏が登壇しました。藤本氏はご存知のように「金正日の料理人」の著者であり、1982年から平壤で金ファミリーの最も近い場所にいた日本人です。同国で撮影した様々な写真をスライド上映しながら、自らの北朝鮮での体験を語りましたが、その写真の中には、北朝鮮に残っている藤本氏の子供達の写真がしばしば出てきました。致し方なかったとはいえ、今も、この子供達や家族のことを思うと心が痛む、何を食べても味がしないような気がする、と、藤本氏は親としての苦しさも吐露しました。

また、藤本氏はキム・ナムスという人物の写真を紹介し、このキムは「小林」という日本名で、同じく日本名で「山田」というキム・ジョンホンと両名で、アジアの拉致に大きく関わっていた可能性があると述べました。藤本氏は1982年、北朝鮮に渡りますが、その時期、東京の日朝貿易商社でこの「小林」をしばしば目にしていたといいます。そして、藤本氏が平壤に行った後、「安山館」という国際レストランで働きましたが、そこでは、藤本氏が来る2ヶ月ほど前、タイから10人の女性が「日本で働けるから」とだまされて、飛行機に乗ったらモスクワに着き、そこから平壤に送られてきてしまったことを、藤本氏は直接女性達から聞きました。実は、この女性達はこのレストランの個室で売春をさせられる目的で連れてこられたようです。しかし、それを知った日朝貿易商社の会長は、平壤に飛んできて、そんなとんでもないことをするなら自分達は北朝鮮との貿易から手を引く、と強く迫り、その結果、この女性達はまず5人、そして83年には残りの5人をタイに帰したといいます。この女性達にとっては幸運なことでしたが、おそらく、決して語らぬよう口止めをされたうえのことでしょう。



有刺鉄線の向こうに粗末な小屋

①



辺りが真っ暗な中、煌煌と灯りが輝く建物

②

そして、今回後継者と目され、実際に個人的な友情も結んでいた金正恩について、18歳の金正恩が、タバコをすいながら「自分達は毎日遊んでいるけれども、一般人民はどうなのかな」「外国では商品が店に山積みになっているけれども、ウリナラ(わが国)はどうなのかな」としみじみ語るのを聞いた、こういういい意識をもっているのだと理解したと語りました。そして、金正恩氏が後継者になって、その後北朝鮮はどうなるでしょうかという質問に対し、藤本氏は、5、6年の間は「世襲」である以上何も変わらない、同じ先軍政治が続くだろう、しかし、その後はすこしずつ、金正恩の開明的な部分が発揮され、改革解放に向かうのではないかと語りました。

ただ、私の個人的な意見ですが、17、8歳のとき、それなりに世の中の矛盾に傷ついたり、社会がよくなってほしいと漠然と考えたり、すべての人や国が幸せになることを望む気持ちになることは、正直誰でもあることではないでしょうか。しかし、それは大人になると共に消え失せていき、結局自分が疑問を感じていた社会の中に入っていくのがごく普通のあり方です。いや、そのような一般論はともかく、金正恩が多少そのような気持ちを持っていたとして、その気持ちをそのまま統治に反映できるような体制であれば、北朝鮮はここまでの全体主義体制にはなっていないはずで、今現れた金正日の写真や姿に、正直、私は藤本氏が感じたような善意を雰囲気としては感じる事ができないことを告白しておきます。



続いて、北朝鮮の内部情報を伝えてきた「開かれた北韓」のハ・テギョン(河泰慶)氏が登壇、今回の金正恩の後継について、まず内部資料として、北朝鮮で宣伝された、金正恩がいかに偉大な人物であるかという文書を紹介しました。

さて、その内容ですが、河氏によればこの資料は4つの部分で構成されており、それは後継者に最も必要な条件が4点に分けて記されているからです。まず第一に、首領に対してもっとも忠実なものが後継者になる、というもので、これはまあ独裁体制では当然でしょう。しかし、以下の条件は次のように続きます。

第2に、思想面、理論面で大家、天才でなければならない。そしてこの資料では、「青年大将同志」(金正恩)は、主体思想も軍事思想も経済学も極めているばかりではなく、古代から現代に至るあらゆる政治、哲学、文化、経済面において該博な知識を備えているとしています。

第3に、政治的、軍事的リーダーシップがなければならない、特に北朝鮮は先軍政治ですから、軍事面の優秀さが強調される。そこまでは解るのですが、河氏によれば、この資料には、「金正恩は百発百中の射撃の名手であり、天下第一の射撃者である」とあり、「3歳の頃から銃を手にし、命中射撃をなさった」「5月、ある地方を訪ねたとき、100メートル先の的を一秒に3発の速度射撃で100発100中で撃ち抜き、次にまた200発の弾丸を真ん中の的に命中させた」などと述べているといひます。河氏は、いまだにこういう話に国民が感銘を

受けと思っているのだろうか、と北朝鮮の相も変らぬ姿勢にあきれてしまった。

第4に、後継者は人民に対し自愛深い父のような存在でなければならないという徳目が挙げられ、そこでは例として、金正恩が地方を視察したときに雨が降ってきて、警備のものが傘をさしかけたところ、人民がぬれているのならば自分も雨に打たれなければならない、と語ったという例が紹介されています。何だか私は聞いていて、かなり前に読んだテリー伊藤氏の「お笑い北朝鮮」に出てくる金正日賛美を思い出していました。

そして、これもまた金正恩の業績として上げられているのが、昨年4月5日のミサイル発射の折、日米韓はこれに対し迎撃の構えを見せていたが、それに対する反抗作戦を金正恩が作り出し、日米韓はこの金正恩の勇気と決意を恐れて迎撃をしなかったとされているようです。このような文章には「先軍政治」的発想がよくわかります。

また、河氏はこの世襲と後継者決定についての脱北者のインタビューをいくつか映像で紹介しました。「あまり興味が無い」、「関心が無い」という反応が一般的で、中には2008年11月の段階で、後継者が金正恩になるという国内の宣伝を知り、「また世襲でこの金体制が続くのか、もうこの国には一切希望が無いと思って脱北してきた」という声もありました。新体制に期待や希望を持っている人は少なく、また、母の高英姫夫人が帰国者であることが、彼の世襲の正当性を傷つける可能性があるかという問いに対しても、北朝鮮では金ファミリーの決定に逆らえる勢力はいないのだからほとんど問題にはならない、もし必要ならどんな歴史の捏造も行われるだろうとある脱北者は答えていました。「金正恩は50パーセントは白頭山、50パーセントは富士山の血統だ」という言葉には笑えましたが。）

そして、ここからは河氏と「開かれた北韓」の独自の分析ですが、金正恩体制に対しては、おそらくどのように宣伝しても民心がすでについていけないだろう、また、金正日と金正恩の間に今後対立が起きる可能性がある。そして、仮に金正恩が完全に権力を完全に掌握した場合でも、今度は張ソンテクが危険要因となるだろう、彼とその勢力が今回政権中枢を握る傾向にあり、この存在と金正恩と軍との関係は緊張関係に向かうのではないかと述べました。

そして、河氏は金正日の生命は様々な専門家の語るころでもって3年くらいであり、だからこそ権力移譲を急いでいるのだろうが、これまでの金正恩の「業績」とされているものは、実はほとんど失敗した政策だと指摘しました。

2009年4月からの「150日戦闘」とされる国民を総動員しての生産増強も、目標の50パーセント以下の達成に終わった。同年11月の貨幣改革もご存知のように大失敗で、経済の大混乱を招き、幹部ハン・ナングに責

任をかぶせて終わった。しかし、一方で河氏は、軍事面では決して悔ってはいけなと警告し、特に今年3月の天安艦撃沈事件などは成功した、金正恩は今後ますます、経済を無視しても軍事的な行動を強めるだろう、金正恩は自らの権力を力で維持することにのみ関心が向いているだろうから、決して平和路線や改革開放には向かわないと述べました。そして、現在、公開銃殺が急激に増加しており、その罪状の多くが、外国のビデオや情報を国内に不法に持ち込んだとされる人々が犠牲になっている、外部から真実が伝わるのを徹底的に取り締まると共に、第二の深化組事件(金日成死後、多大の粛清がなされた事件)が発生するだろうし、同時に、金正恩は外部に敵を作ることによって権力を正当化し強めようとするだろう、今後5年から10年にわたって、このままでは東アジアの緊張が高まり、金正恩体制は東アジアの平和のための重大な危険要因となる危険性があると述べて報告を終えました。

河氏の冷静な分析には教えられるところが多かったのですが、同時に必要なのは、このような情報を通じて、では実際にどうしたら北朝鮮の政治犯収容所の人々を救い出すかという方法論になってきます。金正日や正恩が自らの罪を認めて自発的に収容所を解体する可能性はほとんどゼロでしょうし、安明哲(元強制収容所の警備兵で、「北朝鮮 絶望収容所」の著者)の指摘でも明らかのように、収容所は、無償の強制労働によって北朝鮮経済の根本を支えているシステムでもあります。このシステムをどうしたら破壊できるのか、それを考えていかなければならない段階に来ているのではないのでしょうか。



最後に、収容所体験者の女性、金ヘスク氏が登壇しました。彼女の証言は別項に全文掲載されておりますのでそちらをお読みください。ただだけだと思いますが、私が最も印象的だったのは、彼女の罪はいわゆる越南者の連座制によるもの(朝鮮戦争時にお祖父さんが南に逃げたというの)だったことでした。朝鮮戦争を北朝鮮が仕掛けたことはすでに明らかです。それでいて、自らの失政と戦争犯罪を棚に上げ、戦場の混乱の中で韓国に逃れるしかなかった人の家族を収容所に入れるというのは、まさにかの体制の残酷さ、政府が民衆すべてを潜在的に敵とみなす全体主義体制の象徴です。

そして、もう一つ私が驚いたのは、ヘスク氏が二度も入れられた収容所を脱走できたという事実でした。収容所内はあまりにも人が多く送り込まれ、また殺人犯などが多く、看守、警備兵も十分一人ひとりの囚人を管理できる状態ではなかったという証言は、かの収容所すらも、徹底した管理や統制が緩んできた可能性を示唆します。このような収容所からも再び脱出し、韓国などにたどり着いて貴重な証言を行ってくれる人がさらに現れるかもしれない、その事実そのものが、『収容所国家』北朝鮮の崩壊と解体につながっていくのではないかとこの所に、私は一筋の希望を見たいと思います。

最後に、ノーフェンスの砂川代表が挨拶し、かつて長時間共に語り合った黄氏が本日亡くなったことはまことに残念だと語った上で、今後もこのような収容所を廃絶するための運動を続けていくことを誓って講演会は閉会しました。



[北朝鮮強制収容所の基礎知識] <9>

恐怖の根源—それは同じ

NO FENCE 副代表 小川 晴久

あと2回この欄を担当させていただく。今回はソルジェニツインの指摘から考えさせられたこと、次回は体制と収容所廃絶の同一性と差異の問題。

ソルジェニツインは名著『収容所群島』のなかで、強制収容所が外の社会にどのような影響を与えるかについて重要な指摘をしている(新潮文庫第4冊目、420頁)。10カ条を列举する。

(1) 絶えざる恐怖 (2) 定住制度 (3) 秘匿性、不信 (4) 全面的無知 (5) 密告制度 (6) 生存方法としての裏切り行為 (7) 墮落 (8) 生存方法としての虚偽 (9) 残酷 (10) 奴隷的心理

今ここに項目だけを書き写してみても気づいたことは、これらすべては強制収容所の中の特徴ではないかということである。その通りなのである。これらは強制収容所の基礎知識と言えるものである。しかしソルジェニツインは強制収容所が外の社会に与える影響としてこれを指摘した。となると強制収容所の内と外は紙一重と言うことになる。今回はこの問題について考えてみたい。収容所の内と外、特に外としての北朝鮮社会と他国(例えば日本)である。外としての北朝鮮社会はこれと全く同じであろうから、残る問題は外としての他国、私たちの問題としては日本である。

〈人権の根本としての生命の保全〉

上記10項目を貫いている根源は恐怖である。その恐怖とは自分の生命が失われることへの恐怖である。人権の根本は生命の保全である。世界人権宣言は第三条で、「すべて人は、生命、自由及び身体の安全に対する権利を有する。」と宣言し、日本国憲法は第二十五条で、「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。」と生存権を保障している。北朝鮮もその社会主義憲法第二十五条で、「国家は、すべての勤労者に、食べて着て住むことのできるあらゆる条件を保障する。」とうたっている。また北朝鮮は世界人権宣言を具体化した「市民的及び政治的権利に関する国際規約」に加入しており(1981年9月)、その第十条は、「自由を奪われたすべての者(注：囚人)は、人道的にかつ人間の固有の尊厳を尊重して取り扱われる。」とあって、それを守る義務を負っている。

〈肉体的生命を保障しないチュチェ思想〉

北朝鮮が自国の憲法や加入した国際法を遵守する義務を負っていながら、それを守っていないのは、1967年5月チュチェ(主体)思想を採用して以降全体主義国家になったからである。全体主義国家は、一人支配(個人崇拜)、秘密警察、強制収容所の三つの手段で支配する体制であるから(ハンナ・アレントの全体主義の定義による)、最初から基本的人権は踏みにじられる。チュチェ思想は何よりも人間の「社会的政治的生命」を重視しており、これを失った者は人間のクズと見るから(金日成教示)、人間の肉体的生命は即座に踏みにじられる。いかに自国の憲法で基本的人権が尊重されていても、チュチェ思想が君臨することによって、それは絵に描いた餅になる。まさしく一人支配、秘密警察、強制収容所によって生命の保障すらなくなり、北朝鮮社会はソルジェニツインの先の10の特徴を持つ社会となってしまった。根幹は生命の保障ゼロであり、その恐怖が10の特徴を生み出すのである。

〈では日本はどうか〉

今の日本は世界人権宣言と瓜二つの日本国憲法を持ち、三権分立に基づく政治体制によって、個人の生命は守られ、全体主義を特徴付ける先の10の要素からは免れている。日本には北朝鮮の国家権力は及ばず、私たちは幸せである。「絶えざる恐怖」はない。私たち(日本人)は北朝鮮の収容所内の人々や北朝鮮社会に住む人々の恐怖におびえる生活を知らずとも、楽しく暮らしているし、暮らしていける。しかし北朝鮮の強制収容所に無関心でいてよいであろうか。

〈北朝鮮の強制収容所に無関心でいること〉

無関心でいることは何を意味するか。第一に、それは客観的には強制収容所の温存に加担していることを意味する。関心を持てば、必ず収容所の廃絶を志向するようになるから。第二は、将来日本が全体主義国家になろうとする時、それを阻止する一員にはなれず、そうなった時、自業自得の運命に陥る。

そうだとすれば、私たちは北朝鮮の強制収容所問題に関心を持つべきであり、その廃絶のために努力をすべきという結論になる。自分の生命が奪われることへの恐怖は、体制の如何を問わず、同じであるからである。これを基礎知識の一つにしよう。

『開かれた北韓』ハ・テギョンさんを招き記者懇談 (8月6日、東京弁護士会館で)

かねて当会と親交のある『開かれた北韓放送』代表河泰慶(ハテギョン)さんの来日を受け、HRW日本代表土井香苗さんに労をお取りいただき、8月6日東京弁護士会館にて記者懇談を開催した。

通信社、新聞、テレビ各社の外信部、外報部記者を中心に約40名ほどのご参加をいただいた。

テーマは①金正日の国際刑事裁判所(ICC)提訴に向けた国際社会の動きと、②金正恩への権力継承をめぐる動向。

①韓国のNGOがICC提訴に向け昨年からの動きはじめ、『予備調査』に着手するようICCに要請し受理された一方、今年12月にも国連総会で採択される見通しの北朝鮮人権決議に新たに事実調査団(COI: Commission of Inquiry)を設置するよう求めるとの条項を盛り込むよう今年4月から動き始めた。その成果としてEU議会の北朝鮮人権決議にCOI設置を求める条項が盛り込まれたことに触れ、日本政府・議会としてもCOI設置を積極的に働きかけてほしいと述べた。

②金正恩への権力後継をめぐるのは、2007年から準備が具体化し、人民武力部の総政治局に入り軍の人事を

掌握。2009年には国家保衛部と社会安全省がすべての報告を金正恩に上げ、党の課長以下の中間幹部人事を掌握。副部長級以上の高級幹部については金正恩が提議し金正日の承認を得る形になった。2010年春からは国防委員会のすべての報告は金正恩を経て金正日に上がるようになった。

こうして権力の比重は今年7月段階で金正日30%:金正恩60%:その他10%となっているとした。

(同懇談会後10月までにさらに権力移譲が進み、『開かれた北韓通信』では、「10月現在の金正日は核統制権、統治資金一部権限以外のほとんどすべての権限を金正恩に委譲した」としている)

質疑応答の後、土井香苗さんから、COI設置が特定失踪者を含む拉致問題においても北朝鮮に対してプレッシャーになると意義を強調、今後国連、日本政府に対して強く設置を働きかけていくと表明した。

終了後の夕食会の席でも河代表と記者、NGOメンバーとの間で熱心な質疑が続けられた。

(同記者懇談会の詳細を上野明美さんがaoblogにアップしてくださいましたのでご参照ください)

<http://aoinomama1313.seesaa.net/article/159276133.html>

報告: 宋 允復

NO FENCE 事務局長

United Nations Commission of Inquiry: 国連事実調査委員会
ICC(International Criminal Court): 国際刑事裁判所

国連での北朝鮮・事実調査委員会(UNCoi)と ICC訴追についてのミーティング (9月9日)

報告: 木原和子

NO FENCE 世話人

8月6日、「開かれた北韓通信」発行人ハ・テギョン氏来日による記者懇談会が設けられた際、ヒューマンライツウオッチ、日本代表の土井香苗弁護士が同席され、北朝鮮の人権侵害を国際刑事裁判所に提訴するための初段階の、北朝鮮内加害者の法的責任追及を明らかにするための、国際事実調査委員会(Commission of Inquiry)の設立要請協力を訴えられました。国際刑事裁判所の加盟国でない北朝鮮を提訴するためには国連総会もしくは国連人権理事会の決議によるこの委員会を設立後、国連安全保障理事会が北朝鮮の事態を国際刑事裁判所(ICC)に付託するとの決定を下し、初めて国際刑事裁判所に委ねられるのです。国連事務総長単独で委員会設立も可能です。

そこで、9月9日、来る12月の国連総会での議決を目標に各国政府、NGOが協力して委員会設立運動をしようということになりました。

安保理がICCに付託する条件は、安保理理事国15カ国中9カ国の賛成、そして、常任理事国5カ国が反対票を投じない(拒否権を発動しない)こととなっています。安保理常任理事国5カ国の、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、中国には拒否権があります。北朝鮮を擁護する中国の拒否権行使は十分想定されますが、中国に拒否権行使を断念させ、棄権に追い込み、(その際はロシアもおそらく棄権でしょう)安保理理事国15カ国中9カ国の賛成を得れば、国際刑事裁判所への付託可能の見込みがあります。

2005年3月スーダンのダルフル地方での人権侵害について国際刑事裁判所への付託決議の際、スーダンと利害関係のある中国が拒否権を行使する可能性が非常に高かったのですが、ダルフル地方で発生していることが

人権に対する罪であることが欧米を中心とした国際社会に知れ渡り、その結果、中国は拒否権を行使せず、棄権に追い込まれました。このケースのように、高い関心を集める北朝鮮の人権侵害を欧米を中心とした国際社会で取り上げられれば、中国が拒否権を行使できなくなる可能性が十分にあります。それには、日本及び韓国が中心となり、官民一体の取り組みをもって、北朝鮮の人権侵害についての関心を特に欧米で高めていくことが必要になります。欧米の一般市民に広くこの人権侵害を知らせるよう、マスメディアを使ったキャンペーン、国連人権理事会における普遍的定期的審査(UPR)での粘り強い指摘、同理事会において人道に対する罪であるという決議を示してもらうという国連レベルでの活動も重要になります。

◆◆同9日の後半のミーティングでは、北朝鮮の人権侵害に取り組んでいるNGOのみにより非公開でこの委員会設立のための戦略会議を行いました。土井弁護士、須田洋平国際弁護士から委員会設立運動に政府の承認が不可欠ではないということ、海外の日本大使館に働きかけをしたいということ、告訴中キムジョンイルが死去しても、同罪で後継者を告訴できるとの報告がありました。

ハ・テギョン氏率いるNGOは、脱北者と一緒に欧州をかわきりに多くの国に国際調査委員会設立の必要性を説くキャンペーンにまわるということは8月には聞いていました。彼らのNGOのみでなく、韓国では他のNGOもその働きかけに動き出していることと思います。日本でも、北朝鮮の人権侵害を訴える材料は拉致以外にも何名もの脱北者との接触もあり、帰国者の証言、又はその家族の証言などたくさんあるので、ぜひ他国NGOと強い連携を保ち、欧米諸国へ訴える活動をすべきと思います。直接訪れることは無理でも、インターネット、手紙等の手段で訴え続けるべきと思います。ICCで裁かれるまでの道のりは遠いのですが、北朝鮮の人権侵害を明るみに出し、国際社会が裁くという機会がどんなに小さくとも存在する限りあきらめるわけには決していきません。私個人としては、この運動の他、非民主国の中国とロシアを安保理の常任理事国から降ろさせる手を捜したいと強く思います。

トロント国際会議報告

トロント国際会議報告 小川 晴久

去る8月21日と22日の二日間カナダのトロントで第10回北朝鮮人権・難民問題国際会議が開かれました。主催はカナダのNGO Han Voice と韓国の北朝鮮人権市民連合。ぜひNO FENCEの存在と主張(強制収容所の廃絶)を知ってもらいたいと思い、副代表の私と事務局長の宋允復さんが参加しました。カナダは遠く、航空運賃だけでも一人19万円から20万円かかってしまいましたが、NO FENCEの存在を知らせたいという切なる願いには変えられませんでした。NO FENCEの財政に負担は掛けられませんので、財政上は一人参加ということで出かけました。会場はトロント大学でした。

初日の21日は公開の会議で、3つのセッションから構成されました。

●第一セッションは強制収容所を中心にした国内の抑圧機構についての強制収容所専門家許万鎬(ホマノ)教授の報告と脱北者で元社会安全省の一員の証言。

●第二セッションは難民問題が主題でした。特に女性の人身売買と子供の迫害について、3人の専門家の報告(アメリカの難民問題専門家のロベルタ・コーヘン女史、韓国の医師でもあり大学教授でもある男性の実践活動家、ヒューマン・ライツ・ウォッチの極東担当のケイ・ソクさん)と一人の脱北女性の証言。

●第三セッションは北朝鮮人権改善と難民保護のための戦略が主題でした。その中でPam Shime(パム・シャイム)さんと言うカナダ人の女性がとても意義のある報告をしました。

世界の人権に敏感なよい教育を受けた人々が北朝鮮の人権状況のひどさを知らないと言うギャップから出発しなければならないと言う問題提起と、戦略的なテーマは強制収容所だという設定に、大いに共感を覚えました。ユダヤ人虐殺と結びつけよと言うのが彼女の着眼でした。ユダヤ人指導者、コミュニスト、ホロコース

ト博物館、北朝鮮強制収容所体験者、この問題に取り組むNGOの自然な連携。大学を重要な活動の場とせよという提言も伴いました。

私は質疑の時に発言を求め、彼女の問題提起を高く評価しつつ、NO FENCE という組織が2年前に誕生したこと、北朝鮮の強制収容所に関する英文の一問一答を200部用意したのでぜひ読んで欲しいと訴えました。

22日(非公開)の運動の進め方を議論するセッションでも特に発言時間をもらい(1分間)、収容所廃絶の道筋について発言をしました。宋さんも反アパルトヘイト運動にポール・マッカートニーが参加したようなことが、この運動でも出来ないであろうか云々の発言をしました。

英文の一問一答は、100部は人々の手に渡ったと思います。NO FENCEの名も少しは広がったと思います。英訳して下さった世話人の木原和子さんに感謝します。この英訳もホーム・ページの英文サイトに掲載しないといけません。

トロント行きは経費としては高くつきましたが、NO FENCEとその課題の宣伝はやってきました。又何人かとの交流の手がかりは生まれました。後は我々の英語力を鍛えるばかりです。我々の主張を英語に直し、発信しないことには、交流が出来ません。今まで英語になっている北朝鮮収容所問題の発言や資料もその時の一回限りの活用ではなく、必要に応じて、何度でも活用しましょう。英語に直されているというところが大事です。

最後にトロントの印象を一言。私はアメリカ大陸に渡ったのが今回始めてです。カナダ(トロント)はとてもよい所でした。白人も黒人も、インディオ系も一つになって生活しています。黒人やインディオ系の人が多いのにびっくりしました。ホテルの職員を見ても有能です。オンタリオ湖に面している所を港と称していることも知りました。カナダが好きになりそうです。



(撮影:宋)



トロント国際会議報告

ソン・ユンボク
宋 允復

8月18日から22日まで、カナダのトロントで開催された『北朝鮮人権難民国際会議』に参加しました。

2001年のソウルから数えて今年で10回目、北韓人権市民連合とHAN VOICEの共催。HAN VOICEは在カナダコリアンの若者が中心となって2007年に設立した団体で、カナダに難民として受け入れられた脱北者の定住支援や北人権問題の啓蒙活動などを行っています。

<http://hanvoice.org/en/>

■**プレイベントとして19日**にはトロントの目抜き通りの広場「Yonge Dundas Square」で HAN VOICEのメンバーが中心となってキャンペーンを行いました。ブースを複数しつらえ、国際会議の宣伝、北人権問題の広報、絵画の展示、プルコギの販売、コンサートなど。昼食時には地元の人たちが列を連ねてプルコギ弁当を買い求めていました。

■**翌20日**は昼に記者会見。脱北者2人の証言も行われ、15社ほどのメディアが取材に来ていました。

夜にはドキュメンタリー映画の『The Red Chapel』と『Kimjongilia』(金正日花)がトロント大学図書館隣の市民ホールで上映されました。

前者は、幼児期にデンマークに養子に送られ育った韓国系デンマーク人コメディアン二人組と、デンマークのテレビ局のプロデューサー(マネージャー)が北朝鮮に表玄関から入り、向こうのお膳立てに乗って官製デモにも参加するなど「世界の進歩的人民」として交流した詳細を映像に収めたものですが、北朝鮮側とは案内人兼英語通訳を通じて英語で、聞かれない本音は自分たち同士デンマーク語で使い分け、北の思惑、演出に沿わざるを得なくなっていく苦痛を吐露しているのですが、抱腹絶倒。日本でも上映したいと思いました。

上映後『キムジョンイリア』の監督であるN.C. Heikinさんが挨拶しましたが、この映画を作るきっかけとなったのは、2002年に東京で開催された同国際会議でカンチョルファン氏の収容所体験談を聞いてショックを受けたのが切っ掛けだったと語りました。ご本人がユダヤ人であることもあって、「何かしなければならぬ」と。

このドキュメンタリーにはカンチョルファン、シンドンヒョク、キムヨンスンさんら私たちにもおなじみの方々が登場し、収容所の実態を告発します。

<http://www.kimjongiliasmovie.com/index1.html>

http://www.youtube.com/watch?gl=JP&hl=ja&v=VuCrptkS_JE

この監督のHeikinさんには翌日、会議場に向かう車中、金正日花にまつわる話をいくつか伝えました。

- ・日本の植物学者が品種改良し金正日花と命名して金正日に捧げたものだが、なぜそんなことをしたかという、親族に在日朝鮮人と結婚して北に渡った日本人妻がいて、その身を守るためにおもねった。
- ・もともと亜熱帯原産の花なのだが、金正日の誕生日に合わせて北朝鮮の寒い1月、2月に栽培するためには燃料を消費して温室栽培せざるを得ない。暖を取る燃料さえ乏しい冬に、花の栽培のために人民がたいへん苦労している。
- ・日本に入った脱北者 高政美(千葉優美子)さんによると、この花がうまく育てられなかった、あるいは不平を言ったということも多くの人が収容所送りになった。

といったことでしたが、Heikinさんは「具体的に何人が収容所送りや殺されたか知っているか」と質問し、「ブログにその話を書きたい」と言っていました。

■**21日**の国際会議はトロント大学付属のイザベル・ペイダーホールで開催されました。参加者は200人を超えていたと見えました。

オープニングではNEDのカール・ガーシュマン氏が韓国に入った脱北者たちの韓国社会適応への苦闘と成功の具体例を挙げ、彼らこそが北朝鮮再建、人権伸長の希望だと称えました。Jason Kenny市民権・移民・多文化主義大臣、Dalton McGuintyオンタリオ州知事、Barry Devolinカナダ下院議

員らが祝辞を述べました(紹介も)。続いて許万鎬慶北大学教授が北朝鮮の各種拘禁施設を含む恐怖支配の構造を概括。呉公丹IDA(Institute for Defence Analysis)調査員が金王朝の三代世襲と人民の意識の変化を概説しました。

恐怖支配の生き証人として、人民保安省に勤務し2008年に韓国に逃れた金永鉄(仮名)氏の証言は興味深いものでした。1996年から2000年にかけて起きた深化組事件の当時、人々が大量に強制収容所送りになった状況を知悉しており、都合5万人ほどの無実の人々が収容所に送られ、一年後に釈放された時には、2万人が死んでいた、それでも北当局は「金正日同志の深き配慮であなた方は救われたのだ、感謝せよ」と宣伝していたと証言しました。

国際会議ではここまでが**第一部**で北朝鮮の状況に関する見取り図を得るためのセッションでした。

第二部では脱北者、北朝鮮難民の経る困難と受入国での定着・適応を巡る経験を共有する場となりました。

韓国からHRWのKay Seok、米国のLink代表 Hannah Song、カナダのHa Young Lee氏らが中国における脱北者の状況や各国での受け入れ手続、定着上の困難等について報告しました。

日本からもケイト・ニールセンさんが日本における脱北者の受け入れ・定住について報告と提言を行いました。

第三部ではカナダGlobal Advocacy & Leadership InstituteのPam Shimeさん(女性)が力強いプレゼンを行いました。「北朝鮮の人権状況はクレイジーなのだから、私たちの活動もクレイジーなものでなければならない」としてNGO、大学、メディア、企業、政府、国際機関それぞれ何ができるのか役割を追求し、Youtube、Twitter、Facebook等々技術的に動員できるあらゆる手段を動員して押しとどめようのないパワフルなムーブメントを巻き起こしていこうと訴えました。

小川晴久氏もこれに呼応する形で発言を求め、強制収容所問題にフォーカスすることの有効性を訴えました。

在カナダ日本大使館からお越しの領事の方が質問の形をとって拉致問題を訴えました。

主催者である北韓人権市民連合の尹玄(ユン・ヒョン)理事長が閉会の辞を韓国語で述べたのですが、その中で大意、

「今年は朝鮮半島が日本に支配された1910年から100年目に当たる年だ。その間、わが国は言葉を奪われ、名前を奪われた。しかし日本にもその歴史に心を痛め韓国、朝鮮半島のために尽くそうとする人たちがいる。今日この国際会議に日本から参加している小川晴久教授はまさにそのような人である…」と小川先生に触れ、北韓人権市民連合の立ち上げのころから共にやってきた同志である旨を強調されました。

この領域に関わる関係者の多くが一堂に会した場で、北人権問題で日韓に深い信頼の絆があることを示し得たのは意義があったと思います。

■**翌22日**はHart House Debates Roomで日韓加の国會議員とパネリスト、主催側NGO関係者限定のクローズドな戦略会議を行いました。

日本からは中川正春議員、在カナダ日本大使館の方、小川晴久、ケイト・ニールセン、宋が加わりました。

前半の第一部は「北人権問題でどう運動を展開するか」、第二部は「脱北者問題(特に中国の対応)をどうするか」がテーマで、中でも中国における脱北者、特に子供たちの問題でどうキャンペーンを張るか女性陣が活発に議論を展開しました。ここでの議論をカナダ移民二世の韓国系キム・ヨナ(Yonah Martin)議員が整理し、後日オタワでの議連総会決議に盛り込まれました。

この会議でも小川氏は、政治犯収容所解体に特化した運動体を各国で立ち上げる必要がある等数か条を訴えました。

カナダ、アメリカの若手たちの活躍が印象的でした。多くがコリアンの移民二世で、大学を拠点にネットワークをしっかり形成していますが、中には中国系の青年もいて、人権という価値をベースに何か新しいものを生み出そうと意欲満々でした。日本でも彼らと交流する機会をいずれ設けたいものです。

『北朝鮮難民と人権のための国際議員連盟』第七回総会にオブザーバーとして参加



(宋:撮影)

ソン・ユンボク
宋 允復



トロントの国際会議に引き続き、2010年8月23日から25日までカナダの首都オタワで開催された『北朝鮮難民と人権のための国際議員連盟』第七回総会にオブザーバーとして参加しました。

日本からは中川正春文部科学省副大臣、中井洽拉致担当大臣、大西健介衆院議員(民主党)、オブザーバーとして参加したのは救う会神奈川の川添友行氏、山本吉国氏(ワシントンを拠点にロビーイストとして活躍)、そして宋でした。

総会前日の23日には、在オタワ韓国大使館で夕食会が催されました。

ホストのカナダ側の議員には、韓国系移民二世(8歳で親とともにカナダに渡った)キム・ヨナ議員は、母が愛知県出身の在日だったそうで、議員本人も片言の日本語を話しました。

韓国側からおなじみの黄ウヨ、宋ヨンソン議員のほかにテレビキャスター出身の朴ソンヨン議員とも日韓のあれこれも含めてお話しする時間を持ちました。

詳細は次号で。

黄長燁氏が亡命時に遺書

1997年の亡命当時、北京の韓国大使館で妻のパク・スンオク氏宛ての遺書を作成した。

「残った余生を民主化に捧げる」

この遺書では家族への申し訳ない心情と共に、亡命を選択するしかなかった心境も綴られている。韓国内に入国して13年が経ったが、同委員長はこの遺書の言葉通りに北朝鮮の民主化のために献身した。この遺書が人生に対する悔恨を意味している。

夫人に送るこの遺書を「私が君を騙し君を捨てここに來たが、君をどれほど愛し、私と君の生命がどれほど切ることが出来ないほど結びついているかを、今さら感じた」と書き始めている。

「君が心配して胸を痛めている姿を思い起こす時には、私のように情がない人間でも狂ってしまいそうだ。私は私を信じて従い、私に希望と期待をかけてきた最も近くにいる人々を裏切りました。彼らが私を人間でないと罵るのは当然だと思います。胸が痛いだけで謝罪する方法がない」として家族に対する後悔を表現した。

「私は生きる資格がなく、私の人生は終わったと考えます。あの世があるならばどんなに良いだろう。あの世でもう一度会ってみたい」と綴った。

「もしも、朝鮮労働党が今の非正常的な体制を捨てて改革開放を行い、平和統一を指向すると公開的に宣言するのならば、たとえそれが私を騙すための術策であっても私は平壤に帰って家族らが見守る中で息をひきとりたい」と綴った。

しかし、亡命決心に対して「愛する人と生き別れをしたこの胸の痛みを乗り越えて、私がどれほど生きる事が出来るかは分からないが、余生を民族のために捧げるつもりだ」と話した。

「私個人の生命よりも家族の生命が更に貴重で、家族の生命よりは民族の生命が更に貴重、朝鮮民族の生命よりは全人類の生命が更に貴重だという私の信念に変わりがないということだけは知ってほしい」と綴った。

「あなたがこの手紙を受け取って見る事が出来るかは分からないが、私がいつ命を絶つか分からないから、遺書とみなして書き留めます」と文を終えた。

【出典:2010年10月11日 デイリーNK】